友花

私、夏木美沙には、たった一人のかけがえのない親友がいる。
その子は西村友花という、あまり目立たないけれどとてもかわいい子で、正直、私みたいな地味でなんのとりえもない奴が友達になっていいのだろうかと思うほどだった。
友花と仲良くなったきっかけは、中学生のころに友花が、目立つ女子、いわゆる一軍の人たちにいじめられたことだった。
一軍のリーダー格の子が好きだったクラスメイトに告白され、それを断ったという、いまどき少女漫画でもめったに見ないような理由で、友花はいじめられていた。わざと聞こえるように悪口を言ったり、クラスの子たちに言って、友花に誰も話しかけないようにしたりと、証拠の残りにくい方法だった。最初は見て見ぬふりをしていたが、日に日に表情が暗くなっていく友花を見ていられなくて、私から話しかけたのだ。
話してみると案外気が合って、私たちはあっという間に仲良くなった。そして、そのときからの付き合いが高校生になった今でも続いているわけだ。
今日も、一緒に映画に行こうと待ち合わせをしているのだが、今まで一度も遅れてきたことのない友花がなかなか来ないし、ラインも送られてこないので心配になって電話をかけることにした。
……おかしい。何度かけても友花がでない。いつもならたとえ忙しくても何度かかければ出るはずなのに。
もしかしたら電車に乗っていて、携帯が使えないのかもしれない。そうも思ったが、友花の性格から考えると、それならそれでなんらかの連絡があるはずだ。
どうにも嫌な予感が拭えなかったので、とりあえず何度か行ったことのある友花の家に行ってみようと思った。
友花の家の近くまで行ったとき、違和感に気づいた。
確かにあったはずの場所に、友花の家がないのだ。何度確認しても、そこには、西村とは似ても似つかない苗字が書かれた表札をかけた見知らぬ家があるだけだった。
訳が分からなかった。近くの家の人達に話を聞いてみても、西村なんて家族はこの辺に引っ越してきたことすらなかったというのだ。中学生のころの同級生たちや、高校のクラスメイトに電話で聞いてみても、返ってくる言葉は同じだった。さらに、私の親友は西村友花ではなく、神原詩菜という全くの別人だというのだ。
まるで、友花の存在が私の記憶の中以外から全て消去されてしまったような感覚に呆然としていると、突然、見たこともないし関わり合いになるなど考えたこともなかったような、黒スーツに身を包んだ三十歳くらいの男の人に声をかけられた。
「あの……どうかされましたか？」
親友が突然いなくなってしまった現実を受け入れたくなかった私は、無視してやり過ごそうとした。その男が次に発した言葉を聞くまでは。
「まるで、親しかった人が突然いなくなって、しかもその人が存在していたことすら自分以外の人は覚えていなかった……みたいな表情してますけど」
一瞬何を言われたのかわからなかった。あまりにも今の訳の分からない状況に当てはまりすぎていて、でもそれを認めてしまうと、友花がいないことを認めることになる気がした。そんな私の反応を見て、男はにんまりと笑いながら、畳みかけるように
「私なら、そんなことが起こった理由も、どうやったら解決できるかも教えてあげられますよ」
と言ったのだ。
明らかに胡散臭い。普段なら歯牙にもかけずに無視する類の輩

である。でも、この時の私には、この男の話を信じるしか友花を取り戻す手段がなかったのだ。
「……詳しい話を聞かせてください」
私がそう言うと、男は張り付いたような笑みをさらに深めて、
「そう言ってくれると思いましたよ！　こんな道端で話すのもなんなので、向こうの喫茶店で話しましょうか」
こちらに問いかけているようで拒否権のない男の言葉に頷くと、人のほとんどはいっていない静かな喫茶店に連れていかれた。
そこで男に言われたのは、信じられないようなことだった。
「端的に言いますと、あなたの親友だった友花という人は、将来日本を変える政治家になる人だったんですよ。そして、それを補佐していたのが、夏木美沙さん、あなたなんです」
そう言われても、それがどうして友花がいなくなってしまうことにつながるのか理解できなかった。疑問に思っていると、それが伝わったのか、男は
「なぜそれが西村友花さんがいなくなるのにつながるかといいますとね、将来彼女が行う改革が、とある国にとって非常に不利益をもたらすものだったんです。だから、彼女が政治家になる前に消してしまえということで今回のようなことになったわけですよ」
「ちょっと待ってください。なんでそんなことがわかるんですか。もし仮にあなたの言うことがすべて真実だったとして、どうしてそんなことがわかるんですか。将来はわからないけど、少なくとも今の友花は政治に携わる兆しすらありませんでした！　なのになんで友花は消されたんですか！　そもそもどうやって記憶にも残らないように消すんですか！」
そう私が叫ぶと、男は少し驚いたような顔をして、
「あなた、そんな大きい声出せたんですねぇ。それと、一度に聞く質問が多すぎます。もっとシンプルに聞いてください。今回はきちんと答えますが、次はありません」
と、言った。感想はどうでもいいからさっさと質問に答えろと思っていると、男は笑いながら、
「まず初めに聞きますけど、何から知りたいんですか？　さっきあなたが聞いたのは、大きく分けると、友花さんは今のところ政治に携わるようになるとは到底思えなかったのになぜそんなことがわかるのか、そもそもどうやって記憶にも残らないように存在を消すのか、の二つでしたね。この二つは、実際にはたった一言で済ませられるんです。すなわち、そういう技術が未来において普及しているから、という理由でね」
「意味がわからないです。まさか未来ではタイムワープでもできるようになっているとでもいうつもりですか？」
「鋭いですね。その通りです」
ありえないと思いつつもそう聞いてみると、信じられないことに肯定されてしまった。
「つまり、未来において友花さんがあなたを補佐として政治家になり、彼女が邪魔になったとある国が時間を遡って彼女の家系を途絶えさせるなどして生まれなかったことにしたんでしょうね。あなたに記憶が残っているのは、おそらく将来彼女が携わっていた計画に密接に関わっていたせいで起こった偶然でしょう」
「仮にそれが真実だとして、私はどうしたら友花を取り戻せるんですか。あなたは最初に私に解決策を教えるといったはずですが」
「よく覚えていましたね。できれば忘れていてほしかったんですが……やはりあの夏木美沙なだけはある」
あの、と言うということは、私もそれなりの重要人物なのだな。などと思いながら男の返答を待っていると、とても言いにくそうにしながら彼は
「友花さんが消されてしまった理由には納得いただけましたよ

ね？　そして、これは非常に言いにくいことなのですが、政治家としての友花さんは、夏木さん、つまりあなたですね。の補佐がなければあのような改革はできなかったと言われているんですよ。言われているというか、事実なんですけどね。……と、いうことはですね、友花さんが消えずとも、夏木さんがいなければとある国にとって不利益な改革がなされることもなく、友花さんも消えずに済む……というわけなんですが……」

私は耳を疑った。それはつまり、友花が消えないようにしたければお前が消えろということではないか。そして、どちらを選んでも、もう二度と私と友花がであうことはないのだ。でも、私はもう友花がいない世界にいたくなかった。自分を消すことで友花が生きていられるならば、それでもいい気がしたのだ。しかし、それを実行するには一つ気掛かりなことがある。男の返答によってどうするかを決めようと思い、

「もし私が消えた場合、私はどうなるんですか？　私が経験したみたいに友花の記憶にだけ残ってしまうんですか？」

と聞いてみた。友花が消えてしまったときに味わった思いを、友花にはさせたくなかったのだ。すると、男は笑って、

「それに関する心配は無用です。あなたが存在したという記憶は誰にも残りませんし、友花さんをいじめから救ってくれる人も用意します」

と答えた。それを聞いて、私の覚悟は決まった。

「じゃあ、私が消えます。ただ、二つ条件を付けさせてください」

正直、この条件をのんでもらえるかは賭けだったし、無理ならそれでいいと思っていた。

だから、すこしも迷わずに、男が

「いいですよ。なんでも言ってください」

と言ったときは、若干拍子抜けした。

「じゃあ、まず一つ目の条件ですが、私自身に『私』を消させてください。そして、消す前に事情を説明させてください」

「わかりました。ただ、その時は僕が監視しますがよろしいですか？」

「はい。それで、二つ目の条件なんですが、これは無理なら無理でいいです。『私』が消えた後、本当に友花は大丈夫なのか少しでも確認したいんです」

「……わかりました。いじめから救われるところと、その後を少しでいいのならですが」

「それだけ見れるなら十分です。ありがとうございます」

それだけいうと、私は男に連れられて、過去の『私』を消しに行った。

過去の『私』もやっぱり私で、男にされたのと同じ説明をするとすぐに私に消されてくれた。『私』でも思うことは変わらないんだなぁと思うと少し笑えた。

そのあと、私に残されたほんの僅かな時間を使って、友花のことを見に行った。私以外の人に助けられて、その子と楽しそうに話す彼女を見るのは、すこし寂しかったけど、私が味わった思いをさせずに済んだと思うとなんだか嬉しかった。

しばらくすると、男が、

「もう、時間です。これ以上あなたにここにいてもらうことはできません。友花さんがあなたのことを忘れても、この世界にあなたのことを知っている人が誰もいなくなっても、僕だけはあなたを忘れないでしょう」

と言った。

こうなる覚悟はとっくに決めてあったはずだし、友花が、私がいなくても大丈夫だということもわかっているのに、やっぱり消えたくないな、と思った。でも、もう過去の『私』を殺してしま

った以上、後戻りなんてできない。
　だから私は、すこしでも友花に届けばいいと願いながら、ありがとう、と叫んだ。今まで一緒にいてくれてありがとう、あなたが私の生涯でたった一人の親友でした。どうか幸せに生きてください。と、伝わらないとわかっていながら繰り返し言った。泣きたくなんてなかったのに、涙が溢れてとまらなかった。
　それを横で見ていた男は、何も言わずに、ただ見守ってくれていた。
　まだ、友花に伝えたいことがあるのに、つま先から自分が消えていくのがわかった。最後にもう一度、ありがとう、と呟いて、私は完全に消えた。

「突然ふりかえったりして、どうしたの？友花」
「ううん、何でもないんだけど、なんだか、誰かにお礼を言われたような気がしたの。しかも、その声に聞き覚えがある気がして……」
「えー、そんなことあるわけないじゃん！　気のせいだよー。ほら、早く映画行こ？　友花が遅れたせいで走らなきゃ間に合わないよ！」
「あはは、ごめんね。なにかを忘れてる気がして、家の周りを探してたんだ」
「友花が連絡忘れるなんて、よっぽどだったんだね。そんなに大事なものだったの？」
「うん。何よりも大事だったはずなんだけど、なぜだか思い出せないんだ。いつか思い出せるといいなぁ」